



## 八 再会？さよか

ようやくだ。ようやくここに立てた。立つことができた。いないよは真っ暗な舞台の真中にいる。今日の演目は全て終わり、観客席には誰一人残っていなかった。でも、だからこそ、こうして立っていられるのだ。いや、これまでも、舞台に立つことへの恐怖はなかった。ただ、お客さんを前にすると、面白いことが言えなくなったのだ。頭の中には多くのギャグが渦巻いているのに、いざ、口から出そうとすると、言葉がブーメランのように戻ってきて喉仏にぶち当たってしまう。開いた口はふさがらないじゃなく、開いたままで、お客さんの前で、アホ面をさらしたままとなる。それでも、笑ってくれればいいが、お客さんは白けた顔であたしを見る。勢いが無いとはこういうことなのか。以前なら、間抜けた顔で笑ってくれた。でも、それは次があるからだ。次に面白いことを言うことを期待しているからだ。無言が続けば、誰だって鼻白む。もう、いないよは終わりだ。そんな声が舞台のあちらこちらで囁かれ、その声が集団化し、タイフーンとなって、いないよの自信を吹き飛ばす。そんな光景が目浮かぶ。やはり、あたしは一人では無理なんだ。もうダメなんだ。

いないよはその場にしゃがみ込んだ。そして顔を両手で覆う。でも、涙は出なかった。いたよが亡くなった時に、体中の涙という涙は全て流してしまって、もう、体の中には一滴の涙も残っていなかったのだ。

涙も出ない女。枯れ果てた女。これこそお笑いだ。いないよは目をつぶる。ようやく、家を出て、劇場まで来て、舞台の上に立てたのに、やはり状況は変わらなかった。もう、お笑いはやめよう。いたよが死んで、あたしも死んだのだ。いつまでもお笑いにこだわるのは、すがりつくのはやめよう。

「あんた、どうしたん。うんこ座りなんかして。ここは舞台やで。うんこするんやったら、トイレ行ってえなあ」

誰かの声が出た。聞きなれた声だ。決して忘れることのなかった声。そう、いないよの声だ。立ち上がるいたよ。まさか。いたよは死んだんだ。声が出るはずがない。あまりにもいたよのこと、お笑いのことを考え過ぎて、とうとう、いたよの耳に幻聴が聞こえ出したのだ。

「そう、そう。立ちあがって。でも、立ち上がったら、ちゃんと、お尻ふいてよ。お尻だっけきれいでいたいから」

昔はやったコマーシャルのセリフだ。とうとう、あたしは狂ってきた。頭の中で一人お笑いをするようになったのだ。

「あんた、何を黙っているの。これはお笑いよ。あたしが突っ込んでいるんだから、少しはボケてよ。お笑いは二人の共同作業なんだから」

違う。これはあたしの頭の中の声じゃない。外からの声だ。あたしの耳を通じて聞こえている。いないよは自分の耳をふさいでみた。

「いないよちゃん。言わザルだけだったのに、聞かザルにもなってしまったの？」

やはりそうだ。いたよの声だ。いたよがいるんだ。この舞台の上に。でも姿は見えない。ただし、声はすぐ近くです。あたしは見ザルになったのか。

「いたよちゃん」いないよは大声を上げ、いたよの声がする空間を両手で抱きしめた。だが、両手は何も掴むことができないまま、交差して、自分の胸を抱きしめた。いたい。口から出た言葉は「いたよ」じゃなく、「いたい」だった。

そうだよ。いたよちゃんは死んだんだ。死んだいたよちゃんがいるはずがない。この痛みが現実なんだ。いたよちゃんの声が聞こえるなんて、あたしはどうかしている。あたしはあたし独りで生きていけないといけないんだ。だからこそ、あたしはあたしを抱きしめるんだ。涙が出た。枯れ果てたはずなのに涙が出た。

「あんだ。眼から鼻汁が出てるで」やはり、誰かが話し掛けてきた。涙を拭くより先に言葉が出た。

「鼻汁やないで。涙や。きれいな涙や。なんで、目から鼻汁が出るんや」

「なんや。涙やったんかいな。鼻汁かと思うたわ。それこそ、目からうろこや」

「あたしは魚やないで。なんで、目からうろこが出なあかんのや」

「いやあ。ちゃんとうろこを取つとかんといざ食べた時に、口の中が血まみれになるで」

「そりゃそうや。血まみれだけやないで。うろこまみれや。口の中が半漁人や」

「あんだ、半漁人やなんて、古いネタ知つとるな。それにしても、おいしそうな魚見とつたら、口から涙がでるわ」

「そりゃ、よだれや。みつともないよだれや。目からは涙。鼻からは鼻汁。口からはよだれや」

「なんでもええやんか。涙も鼻汁もよだれも、みんな、同じところから出てるで」

「同じところってどこや？」

「人間や。涙も鼻汁もよだれも、同じ人間から出てるんや。きれいも汚ないも、みつともないもないわ」

「そりゃそうや。あんだ、ええこと言うわ。ほんで、あんだ誰や？」と言って、いないよは気がついた。今、しゃべっている相手は誰だ。やはり、いたよなのか。それとも、空耳なのか。意識までもここに在らずで、いないよとどこかに飛んでいったのか。

「心配せんでも、空耳やないで。ほんまもんの耳や。耳をダンボにせんでも、よく聞こえるやろ。でも、相変わらず、いたとちゃん。体はダンボやなあ。それにしても、あんただけには聞こえるんやなあ。不思議やなあ。でも、よかったわ」

いないよは目を大きく見開いた。間違いはない。いないよだ。いないよが目の前にいる。だが、姿は見えない。けれど、いないよは両腕で、いたよの声がする空間をもう一度抱きしめた。

「いたい、いたい。いないよ。そんなにきつく抱きしめんといてよ」

「あれ。ごめん。いたよちゃん。つい、嬉しかったもんで」

「と、言うのは冗談。あたしはたましいなの。物質じゃないから、掴みようがないのよ。だから痛くはないの」

いないよはいたよの声がする場所をじつくりと見る。確かに姿形は見えない。ただ、声だけは聞こえる。

「いたよちゃん。本当に、そこにいるの？」

いないよは手を伸ばし、てのひらでいたよの顔のあたりを撫でる。

「やめてよ。こそばいじゃないの」

「えっ。感じるの？」

「嘘」

「やだ。本気にしたじゃない。でも、声は聞こえるね。不思議ね」

「そうよ。あたしも不思議。あたしの声はいないよちゃんにしか聞こえないみたい」

「そうなの？」右手を頬に当て、首を傾げるいないよ。

「そうよ。さっき、マネージャーに声を掛けたけど、振り向いてもくれなかったわ。いたよだけど、いないよなのよ」

「それ、笑うね」

「笑うよ」

「また、二人でお笑いしたいね」

「そう、したいね。でも、こうした会話もお笑いじゃない」

いないよはいたよの言葉にはっとした。そうなのだ。お笑いのネタを考えるのに苦労したけれど、こうして、いたよと会話をしていること自体がお笑いなのだ。こんな相手はもういない。そう。いたよは言葉通り「いた」の過去形で、声は聞こえるけれど、もうこの世には存在しないのだ。

「いたよちゃん。お願い。「お笑い」しよ」

「しよって言っても・・・」いたよは黙り込んだ。いたよもいないよとお笑いをしたい。でも、いたよの姿は見えない。声はいないよには聞こえるけれど、他の人には聞こえない。この事実をいないよに伝える。

「それじゃあ、どうすればいいの」黙り込むいないよ。以前の状態に戻った。頭の中は、氷原に寒風が吹きさらしている。その中をどこへ行くあてもないまま彷徨ういないよ。ああ、もうだめだ。このまま凍りついて閉じこもってしまいそうだ。

「いないよちゃん。いないよちゃん。目を覚まして、いないよちゃん」ゴーゴーと吹きすさぶ風の音の切れ間に、いたよの声が聞こえる。

いないよちゃんの声か。そうだ。いないよちゃんの声は聞こえるんだ。あたしはその声を繰り返せばいいんだ。あたしがしゃべり、いたよちゃんがしゃべり、あたしがいたよちゃんの言葉をおうむ返しでしゃべれば、お客さんには二人でお笑いしているように見える。でも、いたよちゃんがしゃべった後、あたしがいたよちゃんの言ったことをしゃべったんでは、間が空く。それこそ、間抜けだ。それに、お客さんから見れば、あたしが一人でしゃべっているように見える。それじゃあ、コンビにならない。そのことをいたよちゃんに相談する。

「それなら、腹話術にすればいいのよ」

「腹話術？」

「そう、腹話術」

「腹話術って、お正月に、目隠しをして、目や鼻なんかの絵で顔を作るやつ？」

「それは、福笑い。何ボケているの？」

「じゃあ、鬼は外、服はユニクロって叫んで、豆をまくやつ？」

「それも言うなら、福は内でしょ。いないよちゃん。いいかげんにして。今から、お笑いしてどうするの」

「じゃあ、腹話術って、どうやるの？」

「いないよちゃんがあたしの人形を作って、その人形に話し掛けるの。あたしがすぐにしゃべるから、いないよちゃんは腹話術をやっているふりで、あたしが言ったことをしゃべればいいのよ。そうすれば、少し間があっても、おかしくないわ」

「それ。それいいわ。いたよちゃん、最高！」

いないよはいたよを再び抱きしめる。「痛い」と再び、いないよが声を上げる。もちろん、いないよの両手は空を掴むだけだったが。

早速、いないよはいたよ人形を作り、左手で動かしながら、口角を上げ、唇を動かさないでしゃべる腹話術のふりの特訓に取り組んだ。

ここはいないよの控室の外。

「いないよちゃん。どう？復活しそう？」舞台監督がマネージャーの横に立った。

「ええ。以前と全く違うわ。それに、本当に、いたよちゃんとしゃべっているみたい」

「腹話術とはよく思いついたな。それは君のアイデア？」

「いいえ。いないよちゃんのアアイデアよ」

「やっぱり、いないよちゃんはいたよちゃんが忘れられないんだ。いないよちゃんが亡くなって、落ち込んでいたけれど、逆にそれを利用してお笑いにしたのだから大したものだよ」

「そうね。ピンチはチャンスね。これからもいたよといないよのコンビは続くのよ」

「期待しているよ」

「私もよ」

舞台監督とマネージャーは控室のドアをそっと開けた。中には、人形を片手にお笑いの練習をしているいないよがいた。